

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：35411

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04594

研究課題名(和文) イギリス新教育における「女子・女性教育論」とジェンダーに関する思想史的研究

研究課題名(英文) Research on history of education for girls/women, and aspects of gender in the New Education movement in Britain

研究代表者

山崎 洋子 (Yamasaki, Yoko)

福山平成大学・福祉健康学部・教授

研究者番号：40311823

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では新教育運動に関する二項対立的歴史編纂を問う観点から、イギリス新教育運動家でケンブリッジ女子教員養成カレッジ校長のヒューズ(Hughes, E.P.)の女子教育論と教授法、公立基礎学校校長ジョンソン(Finlay-Johnson, H.)の学校劇論を取り上げ、女子・女性教育に関する言説をジェンダーの枠組みに位置づけ、そこに安井てつこのトランスナショナル及びトランスカルチュラルな思想を投入し、ズレ・相互補完関係を考察した。彼女らの新しい教育技法・各科教授法は進歩的で斬新であったが、女性としての権利意識や階級・社会批判を欠いた家父長的な女子・女性教育論であり、時代的制約を内包している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

イギリスを起源とし、19世紀末から1930年代初めにかけて世界各地で共時的に生じた新教育運動という歴史事象は、これまで旧・新という言葉で冠して二項対立的に説明されてきたが、本研究では、女子・女性教育、ジェンダー、トランスナショナル、トランスカルチュラルといった視点を投入することによって、従前の歴史叙述の書き換え根拠を見いだした。教育思想の解明においては、多層・多重に織りなす教育諸概念の関係構造の背景に光を当て、埋もれている言説の意味内容を明らかにし、その歴史的意義・限界を客観的に解明する必要がある。こうしたことにアプローチし得たことが本研究の学術的意義である。

研究成果の概要(英文)：For an alternative historiography, questioning previous stereotyped accounts of a binary opposition between the Old or the New education, I focused on key ideas of pedagogy for women and girls: ideas for women and children proposed in lectures that E. Hughes delivered in Japan; the dramatic method developed by Finlay-Johnson; and finally positioning their new ideas and methods in the framework of new social and cultural viewpoints of gender embedded in concepts of the transnational and transcultural experienced by Tetsu Yasui.

Their ideas about education focusing on the individual child, and enjoyment of learning through dramatic method for all subjects, were radical, nevertheless lacked any critique of a gendered and classed society. From a modern perspective, a weak point in their ideas appears to be a lack of teaching about awareness of women's rights or a critical stance to traditional gender bias in acceptance of women's primarily domestic role as wives and mother.

研究分野：教育史

キーワード：新教育 イギリス 女子・女性教育 ジェンダー 学校劇 ハリエッタ・フィンレイ＝ジョンソン エリザベス・ヒューズ トランスナショナル

## 1. 研究開始当初の背景

19世紀末から1930年代初めまでの時期に世界の先進的な国々で共時的に生じ展開された教育改革は新教育運動と称され、イギリスで誕生した新学校 (New Schools) とその教育実践を嚆矢とする。新教育運動に関する日本での一連の研究としては、「国際的な新教育運動を総合的に考察し、その歴史的意義を明らかにすることを、・・・目的とし・・・教育学説史への展望を開く」(長尾, 1988, 3) ことに挑んだシリーズ、長尾十三二監修『世界新教育運動選書』(全30巻、別巻3巻、明治図書, 1983~1990年)があり、日本ではその後も様々な研究成果が著されてきた。ただ、新教育というネーミングゆえに、「旧」対「新」という二項対立的な印象を与えてきたことも否めない。近年、この状況を省察し、新教育思想の実践や理論に内在する多義性を明らかにした研究も刊行されてきた。(山名, 2006, 2015; 渡邊, 2016) また、イギリス新教育運動に関しては、1925年頃に優勢思想が受容されたことが解明され(山崎, 2011a; 2011b)、さらにまた、イギリス本国では、新教育思想を継承した進歩主義教育思想は1960年代に終焉したという研究も著されている。(Lowe, 2007. 山崎・添田監訳, 2013)

しかし、これらの研究にも課題は残されている。たとえば、女子教育・女性教育に対する新教育運動家の考え方を解明する必要があるのではないかと、取り上げる新教育運動家が男性に偏っているのではないかと、新教育思想形成の過程において、トランスナショナルやトランスカルチュラルな視点が必要ではないかと、といった問いである。本研究の問題意識は、こうした問いに導かれているため、本研究開始当初の背景は、以下のようにまとめることができる。

- (1) イギリスを嚆矢とする新教育運動という歴史事象に関して、「旧」対「新」という解釈枠組みを乗り越える視点を取り入れたイギリス新教育運動研究は、緒に就いたばかりである。ただし、イギリス新教育思想が伝統的な教育観に基づいた優生思想へと変遷していく様相については、学力試験や評価と関連づけて解明されている。
- (2) イギリス新教育運動研究においては、レディ (C. Reddie, 1858-1932)、バドレー (J.H. Badley, 1865-1967)、ナン (T. P. Nunn, 1870-1944)、ホームズ (E. Holmes, 1850-1936)、ニール (A. S. Neill, 1883-1973) といった男性の新教育運動家の教育思想についての研究はあるが、女性の新教育運動家についての研究は十分ではない。
- (3) イギリスの新教育運動期に開発・実践された新しい教授法や教育内容に関して、女子教育・女性教育、さらにはジェンダーの観点からアプローチした研究は皆無である。また、女性の新教育運動家の教育思想にトランスナショナル及びトランスカルチュラルの視点を投入した研究は存在しない。
- (4) イギリス新教育運動期の思想解明に必要な基礎的第一次史料には、新教育連盟 (New Education Fellowship) 刊行の季刊雑誌『新世紀』(The New Era) とイギリス中央政府刊行の『ハドゥ報告書』(Hadow Report: The Primary school, 1931) があり、それらのほとんどは本研究代表者が所有している。また、その周辺の第一次史料などについては、ケンブリッジ大学図書館、ロンドン大学教育学研究所図書館、大英図書館に所蔵されている。
- (5) この領域のイギリス本国の研究者にはカニンガム (Peter Cunningham, University of Cambridge, 本科研海外研究協力者) とロウ (Roy Lowe)、さらにハドゥ報告書教育思想を継承した『プラウデン報告書』(Plowden Report, 1966) のモデル校・Eveline Lowe Primary School の第三代校長フォスケット (Gary Foskett, 本科研海外研究協力者) がいるが、いずれも女子教育やジェンダーの視点から新教育思想にアプローチしていない。また、ジェンダーに関する教育史家のグッドマン (Joyce Goodman, Winchester University, 本科研海外研究協力者) やマーティン (Jane Martin, Birmingham University) による研究の精査は未着手である。

以上の5点が研究開始当初の背景である。

## <引用文献>

- 長尾十三二監修 (1988) 『新教育運動の理論』明治図書出版  
宮野安治・山崎洋子・菱刈晃夫 (2011) 『講義 教育原論：人間・歴史・道徳』成文社  
山崎洋子 (2011a) 「イギリス新教育運動における「試験」・「知能テスト」をめぐる論争とジレンマ」『武庫川女子大紀要 (人文・社会科学)』59, 43-52.  
山崎洋子 (2011b) 「イギリス新教育運動の拡大と混迷」『武庫川女子大紀要 (人文・社会科学)』59, 53-62.  
山名淳 (2006) 『夢幻のドイツ田園都市：教育共同体ヘレラウの挑戦』ミネルヴァ書房  
山名淳 (2015) 『都市とアーキテクチャの教育思想：保護と人間形成のあいだ』勁草書房  
Roy Lowe (2007), *The Death of Progressive Education: How Teachers Lost Control of the Classroom* (ロイ・ロウ著, 山崎洋子・添田晴雄訳, 2013) 『進歩主義教育の終焉：イングランドの教師はいかに授業づくりの自由を失ったか』知泉書館  
渡邊隆信 (2016) 『ドイツ自由学校共同体の研究—オーデンヴァルト校の日常生活史—』風間書房

## 2. 研究の目的

本研究では、19世紀末から1910年代までのイギリス新教育思想における女子・女性教育に関する教育言説（国家・社会へのメタ言説を含む）に焦点をあて、イギリス新教育運動全体を二項対立図式ではない形で再構成し得る道を探った。具体的には、トランスナショナル及びトランスカルチュラルな視点を投入しながら、新教育を実践した2人の女性教育家、エリザベス・ヒューズ（Elizabeth P. Hughes, 1851-1925）とハリエッタ・フィンレイ＝ジョンソン（Harriet Finlay-Johnson, 1871-1956）に着目し、加えて、ヒューズの愛弟子・安井てつ（1870-1945）の教育思想にも目を向け、以下のような3つの具体的な目的を掲げた。

- (1) 【研究目的1】 <1年目> イングランドのサンプティングの公立学校の女性校長、フィンレイ＝ジョンソンがなぜ劇化学習法（Dramatic Method）を開発したか、女子教育・性差に関わる彼女の言葉がどのようなカリキュラム言説や文脈の中で用いられていたかを明らかにし、そこに潜在する女子教育思想の特徴を析出する。
- (2) 【研究目的2】 <2年目> ケンブリッジ女子教員カレッジの女性校長、ヒューズの子ども観、人間観を明らかにし、それに基づいて、彼女が提案した教授法における女性のための教養や自己実現概念の有無、その後の新教育運動家が強調した「社会的態度」、「他者への説得技法」への言及の有無を明らかにする。その際に、彼女の弟子、安井てつの「人格主義の女子教育論」との異同、その内実のズレ、差異、包含関係などを解明する。
- (3) 【研究目的3】 <3年目> イギリス新教育運動における女子・女性教育思想の特徴とそれを構成する教育言説の重層性・多義性をジェンダーの文脈に位置づけ、また男女共学論との異同を確認しながら、イギリス新教育運動の革新性を女子・女性教育論の観点から考察する。そして、新教育運動の新しい歴史編纂の道を検討する。

## 3. 研究の方法

研究の方法としては文献研究が中心になる。そのため、重要な第一次史料を的確に選出し、それらを俎上に載せて読解し考察を加えることに多くの時間を費やした。また、これに加えて、イギリスの研究協力者や先行研究者との研究会を実施し、意見交換、インタビュー、聞き取りなどを行った。年次順に本研究が採用した方法及び手順を述べると、以下の通りである。

- (1) 1年目は、【研究目的1】にアプローチするため、研究代表者のこれまでのイギリス新教育研究の成果とこれまでに収集した第一次史料を改めて俎上に載せた。まず、新教育思想として当時、高く評価された女性校長のジョンソンの執筆した『劇化学習法』（*Dramatic Method of Teaching*）（1911）に女子教育・性差に関わる言葉がどのようなカリキュラム言説や文脈の中で用いられているかということ調べた。その際に、フィンレイ＝ジョンソンの邦訳版が大正12年にニール研究者の霜田静志訳で刊行されていることを突き止め、それを入手した。そして、英語版・日本語版双方を遡上にもって、ヴィクトリア的の女子教育の文脈を意識しながら、フィンレイ＝ジョンソンが言及した「娘・女性・家庭・裁縫・料理」といった女子教育に典型的な教育内容を取り上げ、彼女が性差や女性の権利についてどの程度意識していたかに関わる言説を抽出した。同時に、先行研究の *A Little School on the Downs: The Story of a Remarkable Victorian Schoolmistress and Her Sussex School*（2002）の著者のメアリー・ボーメーカー（Mary Bowmaker）とのコンタクトを試みた。そして、これと並行しながら、フィンレイ＝ジョンソンの実践に啓発されたケンブリッジのパス校のクック（H. C. Cook, 1886-1939）の著作『劇的方法』（*The Play Way*, 1917）の中に「娘・女性・家庭」に関わる教育言説がどの程度あるかを確認し、フィンレイ＝ジョンソンとクックの教育思想の同質性・相違性を調べた。さらに、イギリス中央政府の刊行した『教師の手引き書』（*Suggestions for Teachers*, 1905）と『ハドゥ報告書』の中に盛り込まれた女子教育に関する内容を俎上に載せ、フィンレイ＝ジョンソンの教育観との異同を考察した。そして、11月末にウィンチェスターで開催されたイギリス教育史学会（History of Education Society, UK）の50周年記念年次大会において、霜田とフィンレイ＝ジョンソンの教育思想の特徴について研究発表した。そして、そこで本研究が考察枠組みとして設定したトランスナショナル及びトランスカルチュラルな視点を女子教育研究に投入した海外研究協力者のグッドマン（ウィンチェスター大学女性教育史研究センター創設者）より、生育歴に着目する必要があるとの助言を得た。また、ロンドンでのプラウデン50th記念大会（Plowden 50th Anniversary）に参加し、進歩主義教育の思想史に関する助言をカニンガム氏、フォスケット氏より得た。さらに、ヒューズの愛弟子であった安井てつの諸論考を雑誌『婦女新聞』（1号の明治33年から昭和5年まで）から抽出し、ジェンダー・バイアスの観点で類型化することに着手した。
- (2) 2年目は【目的1】をさらに精査するために、フィンレイ＝ジョンソンの著作『劇化学習法』において、girl, home making, sewing, cooking, boy, geography, community, family,

natural, poem などの言葉がどのような文脈で用いられているかを調べた。そして、海外研究協力者のフォセット氏の助言と協力を得て、フィンレイ＝ジョンソンを称揚した勅任視学官のホームズの著作『教育の現状と可能性』(What Is What Might Be, 1911)及び『ハドゥ報告書』の中の女子教育論を精査した。8月には、ボーメーカー氏へのインタビューを海外研究者のカニンガム氏と実施し、第一次史料の所在の情報を得た。同時に、【目的2】にアプローチするため、彼女の弟子、安井てつの「人格主義の女子教育論」との異同に関して、両者が共通して用いる言語 (the language of co-operation) に着目し、その内実のズレ、差異、包含関係などの解明に取り組んだ。そして、ヒューズに関する先行研究、とりわけ、Pam Hirsch と Mark McBeth による *Teacher Training at Cambridge: The Initiatives of Oscar Browning and Elizabeth Hughes* (2004) や、大野延胤による論文 'E. P. Hughes in Japan (1901-1902)' を俎上に載せ、そこにいかなる女子教育の視点があるかを確認した。その際に、留意したのは、女子教員としてのヒューズの強力な人格形成過程を解明する分析視点である。本研究で採用したのは、イギリスの教育史研究者でジェンダー史研究に取り組んでいるパーミンガム大学のマーティンのいう4つの分析的レンズであった。マーティン (2003) は、'The hope of biography: the historical recovery of women educator activists' (*History of Education*, Routledge, 32:2) の中で、伝記 (biography) というレンズが社会・文化・政治の複雑層に橋渡しするというに着目し、歴史分析に役立つ4つの方法を提示した。それは、①アイデアの起源を探るための能力 (capacity)、②社会的選択肢とその代替可能性を分析する手段としての能力、③社会的変化の本質を観察する窓としての能力、④人間エージェンシー (human agency) と社会構造との交差に生じる能力、の4つの能力である。彼女は、これらを探ることによって、教育思想とジェンダーの関係がより明らかになると論じた。そこで、改めて、ヒューズの履歴をこれらの視点から再検討した。そして、ヒューズの幼児教育に関する講演録「幼稚園に於ける幼児個人性の発達及保護 (説林)」(『婦人と子ども』第1巻第11号、フレーベル会、1901年11月、57-63)、東京高等師範学校でのヒューズの講義をまとめた著作『教授法講義』(山海堂書店、1902)を取り上げ、そこに潜在する女子教育に関する言説・メタ言説の析出に取り組んだ。この内容については、海外研究協力者のカニンガム氏とフレーベル国際学会にて研究発表し、彼及び聴衆から研究助言を得た。

- (3) 3年目は、【目的3】に迫るため、女子・女性教育思想の特徴とそれを構成する教育言説の重層性・多義性をジェンダーの文脈に位置づけて考察し、さらに共学論との異同を確認するため、男女共学論 (Coeducation in Practice, 1914) を展開したビデーズル校のバドレー (J. H. Badley, 1865-1967) やシズウィック校 (Cheswick school) のウッズ (A. Woods, 1849-1941) の思想との比較検討を行った。また、安井の第一次史料・第二次資料・先行研究については、改めてトランスカルチュラルの観点から文化軋轢・葛藤・妥協等の有無を確認し、彼女の発言をジェンダーの枠組みで考察した。その際には、女性の態度形成に関する保守的ターム (性教育・出産・家庭教育等) だけでなく、「社会的態度」、「他者への説得技法」といった民主的・社会改革的タームにも着目し、諸言説の相関関係を確認した。その上で、社会政治的文脈の検討に向け、1920年代のタイムズ教育版 (Times Educational Supplement) に掲載された女子教育に関する記事も考察対象とした。そして、8月初頭に海外研究協力者のグッドマンらと研究会を実施し、国際教育学会 (World Education Research Association) で発表し、講評を得て省察した。また、8月中旬から渡英し、これらの解明点を踏まえてケンブリッジ大学図書館、大英図書館、ロンドン大学図書館にて海外研究者と研究会を実施した。そして、さらに第一次史料にあたって精査し、イギリス新教育運動期における女子・女性教育思想の限界・脆弱さなどを確認した。

#### 4. 研究成果

本研究の成果は、以下の6点にまとめることができる。

- (1) ヒューズ及びフィンレイ＝ジョンソンの新しい教育技法・各科教授法は、注入主義的・活動的ではなく、また教師中心でもない。ヒューズは子どもの個性を大切に扱うことを強調し、一人一人の性格や心理をしっかりと観察することの重要性を主張した。それゆえ、ヒューズが推奨する教授法は、子どもや生徒の感情や意欲を考慮に入れた進歩的なものであった。また、フィンレイ＝ジョンソンの全ての教科に劇を取り入れた劇化教授法は、子どもたち自身が調べ、シナリオを作り、対話的に学ぶ機会を与えるという、極めて革新的な方法であった。さらに、古典語や3R'sなどを注入的に教えるのではなく、理科、アート、詩、体育など、幅広い教育内容と関連づけて教授することを強調した。
- (2) しかし、ヒューズ及びフィンレイ＝ジョンソンが実践した教授内容には、女性としての権利意識や階級・社会批判は存在せず、男性中心の社会への批判も認められない。また、「社会的態度」、「他者への説得技法」といった民主的・社会改革的な教授内容も存在しな

かった。その意味で、伝統的な社会構造や家父長的制を前提とした女子・女性教育論であった、と解することができる。つまり、今日的な視点からすれば、教育方法論としては新しいが、教育内容論としては伝統的で古いものであった、と言わざるを得ない。

- (3) ヒューズ自身の教育思想の形成過程には、トランスナショナル及びトランスカルチュラルな影響・状況が看取される。19世紀末の安井てつとの交流や20世紀初頭の日本での学校参観による文化軋轢と葛藤が時代的制約を乗り越える意欲を生み出さなかったと解することもできる。なぜなら、ヒューズは、男性中心のケンブリッジ大学当局からの経営上の無理難題に向き合い、体調を壊しながら、弟子の安井との交流を支えにカレッジ運営に奔走し、退職と引き替えに日本の教育視察の任を引き受けた、という経緯があったからである。また、フィンレイ＝ジョンソンにもトランスカルチュラルな状況が認められる。というのも、彼女はかつての教え子と結婚したために世間の批判を浴び、誹謗中傷、葛藤の末、辞職を経験しているからである。その後の彼女の著作活動はそれを昇華するための活動でもあった、と解することができる。
- (4) フィンレイ＝ジョンソンの教育思想をイギリスだけでなく、アメリカや日本に知らしめる契機は、勅任視学官でイギリス新教育運動を牽引したホームズの著作にあった。ホームズは、彼女をエゲリア (Egeria) という女神の名前をつけて称揚しているが、そこにジェンダーの視点は存在しない。日本ではニール研究者の霜田静志が各科教授法と題して翻訳していることが判明したが、そのスタンスにはイギリスの女性教師を称揚する姿勢がある一方で、日本の女性教師の活躍をサポートする姿勢は見られない。
- (5) 以上を踏まえると、新教育思想の歴史編纂においては、教授法の革新性と教育内容の伝統性との関係構造を考慮に入れて描出する必要がある。ただし、本研究で取り上げた人物以外の新教育運動家の女子・女性教育に対する思想を解明する課題は残されている。
- (6) 上記の研究成果の副産物として、研究方法に関する成果がある。具体的には、イギリスの教育史研究がどのような問題関心、トピックを対象としてきたか、ポストモダンの時代になってどのようなテーマがいかなる研究方法で解明され、歴史編纂されているか、採用したトランスナショナル及びトランスカルチュラルな視点を教育史事象にいかに入力するか、という新しい研究方法や視点が得られた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Yoko Yamasaki	4. 巻 30
2. 論文標題 Perspectives on the entangled history of New Education movemet:Elizabeth Hughes, Tetsu Yasui and Harriet Finlay-Johnson	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 武庫川女子大学言語文化研究所年報	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎洋子	4. 巻 43
2. 論文標題 教育学の立場から子どもの幸福と教育を考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関西教育学会年報	6. 最初と最後の頁 149-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoko Yamasak, Peter Cunningham	4. 巻 29
2. 論文標題 Transcultural collaboration for personal development in early childhood education: Tetsu Yasui and Elizabeth Hughes	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 武庫川女子大学言語文化研究所年報	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎洋子	4. 巻 vol.85,no.4
2. 論文標題 「インターナショナルからトランスナショナルへの交錯史」探訪 - イギリス教育史家の葛藤と矜持 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育学研究	6. 最初と最後の頁 493-505
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.11555/kyoiku.85.4_493">https://doi.org/10.11555/kyoiku.85.4_493</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Peter Cunningham, Yoko Yamasaki	4. 巻 5(2)
2. 論文標題 Space and Time in the Creative Curriculum: Drama and education in two island nations in the early twentieth century	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Espacio, Tiempo y Educaci&oacute;n	6. 最初と最後の頁 11-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="http://dx.doi.org/10.14516/ete">http://dx.doi.org/10.14516/ete</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Yoko Yamasaki	4. 巻 28
2. 論文標題 An Eastern progressive: Seishi Shimoda as a conduit of innovation between UK and Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 武庫川女子大学言語文化研究所年報	6. 最初と最後の頁 11-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計4件(うち招待講演 1件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Yoko Yamasaki, Peter Cunningham
2. 発表標題 Transcultural collaboration for personal development in early childhood education: Tetsu Yasui and Elizabeth Hughes
3. 学会等名 The 8th Froebel International Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山崎洋子
2. 発表標題 教育学の立場から子どもの幸福と教育を考える: Children-Our future; Teachers' challenge and reward
3. 学会等名 関西教育学会 第70回大会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoko Yamasaki
2. 発表標題 An Eastern progressive: Seishi Shimoda as a conduit of innovation between UK and Japan
3. 学会等名 History of Education Society UK (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoko yamasaki
2. 発表標題 Perspectives on the entangled history of New Education Movement: Elizabeth Hughes, Tetsu Yasui and Harriet Finlay-Johnson
3. 学会等名 World Education Research Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Yoko Yamasaki	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 222
3. 書名 Educational Progressivism, Cultural Encounters and Reform in Japan	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----